
彼女の死

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の死

【Nコード】

N4795K

【作者名】

羅幻徒

【あらすじ】

帰宅した家の中で、妻が死んでいた。夫は自殺ではないか？との疑念に遺書を探し始める。しかし、遺書の類は見つけられなかった。

帰ったら、妻が死んでいた。

日の短いこの時季は、夕方になるとすっかり暗くなる。それなのに家の中は真つ暗で、明かり一つ燈されてはいない。だけどその時は、ああまたか、というくらいしか考えていなかった。

鍵のかかっていない玄関のドアを開け、無造作に脱いだ靴もそのままにリビングへと向かう。脱いだジャケットと鞆を、ぼんやりと輪郭の浮かんだソファの上に放り投げた。

火の気のないキッチンを白けた気持ちで横目に見てから、その奥にある部屋に向かう。寝室であるその部屋のドアを開けて、室内の暗さに立ち止まった。目が慣れて、闇の中にベッドの盛り上がりを感じた途端、あからさまなため息を吐き出している自分を意識した。

妻には虚弱体質の気があった。病院できちんと検査をして貰った訳ではないので、本当に虚弱体質なのかは判らない。だけど、眩暈だ貧血だと臥せているのが大半で、幸か不幸か結婚八年目を数える今も子供がいない状態だ。こんな体質だと知っていたら、もしかしたら、彼女との結婚は考え直していたかも知れない。

とにかく、彼女が臥せて家事すら疎かにする状況は何度となく経験している。朝食がないのは日常茶飯事だし、友人を家に招くことさえ博打のようなものだ。入院しなければいけない大病なら世間体も立つだろうが、今の状況では、お前の嫁さんは引き籠もりか？とからかわれるのが関の山。

そして今日も、妻はベッドの中にいた。今日はいつから寝ているのだろう。人が苦勞して働いているのに　そんな嫌味も、そろそろ面倒にすらなりかけている。

おい、と声をかけながら、布団の上から軀を揺すった。反応がないことに、毎度のことながら声を荒げたくなる衝動が起こる。それでも何とか堪えたのは、妻を愛しているからというよりも、もう既に諦めが感情の大半を占めているからだろ。もう一度軀を揺すって、それでも反応がないのを認めてから、サイドテーブルに置いたスタンドのスイッチに手を伸ばした。

眩しくさえ感じる照度にも、妻は身動き一つしなかった。さすがに神経を逆撫でされて、おい、と手荒く蒲団をまくる。横を向いたままの妻の肩に手をかけて……その冷たさに、思わず手を引いた。

ぼんやりながら見えていた室内は、今ではすっかり闇の中へと埋没していた。陽は完全に沈んでいた。もしかしたら、月明かりは入って来ているのかも知れないが、スタンドが照らすベッドの上しか見えていなかった。

妻が、死んでいる。

揺すった反動で軀が仰向けになった程度だ。目は固く閉ざされているものの、口は半開きで僅かに舌の先が覗いている。

伏せられていた顔の半分が僅かに青くなっていた。恐る恐る頬を擦ると、僅かに色が退いた気がした。だが、口元を滑った指先に奇妙に強張りが返って来て、反射的に手を退いた。

渴きを覚えて、無理矢理唾を飲み込んだ。自分の歯がガチガチと音を立てていることに、その時になって初めて気付く。

妻が、死んでいる。

スタンドの明かりに照らし出された彼女の顔を見下ろしながら、声にならない声で呟いた。

やっと視線をもぎ離して、深く息を吸い込んだ。

不意に腐肉のような匂いがしたのに、慌てて手で口を塞ぐ。しかし、その手は先に妻の臍に触れたものだ。弾かれたように引き剥がして、服の袖で痛くなるほど口元を拭った。

摩擦で熱くなった唇に、何故か怒りがこみ上げてきた。こんなところで死にやがって。面と向かって云ったことなどない、杜撰な言葉が口が出る。表情もなく横たわる妻に対して、力の限り殴りつきたいという衝動が生まれた。

しかし、そんなことをしても何になるだろう。むしろ、下手に傷を付けては、自分が殺人者にされてしまう虞すらある。勿論、入念に調べれば、妻の死亡時刻に自分が家にいなかったことは判るはずだ。ずっと職場にいたことは、上司を含めた多くが証言してくれる。帰路の電車で外回りに出ていた同僚と一緒にあったから、その点も問題ない。行きつけの呑み屋があると誘われたとき、彼は時計を見ていたから、そこで別れたあとの数十分が自宅までの道程に要したものだとして立証できるだろう。その誘いに乗っておけばよかったと、今更ながらに後悔する。

とにかく、どんな些細な疑惑さえ向けられては迷惑だった。自分は今これまで、この女のために不自由極まりない生活を続けてきたというのに、今後得られるであろう昇進にまで横槍を入れられたくはない。同僚が子供の話をするとき……どこそこに行かされた、渋滞で大変だった、現地に付いても行列だ、今度は何がしのアミューズメント・パークに連れて行かなきゃいけない、運動会だ、授業参観だ、遠足だ……それらを蚊帳の外で聞かされる自分の立場の、何と情けなかったことだろう。女房一人孕ませられないのか？ とからかわれたことは、一度や二度のことじゃない。自分ではなく、妻の方こそが欠陥品なのに。

その時ようやく、自分が何をすべきなのかに気が付いた。警察に連絡しなくては。いや、救急車を呼ぶべきだろうか。

どっちにしろ、このまま放っておく訳にはいかない。この家は、

自分が築いた城なのだから。

携帯電話を取ろうとして手を胸に当てた。ジャケットの内ポケットにしまい込んでいるための癖だったが、しかし、ジャケットはリビングのソファの上に置いてきていた。仕方なく寝室を出て、リビングへと急ぐ。

ソファの上のジャケットに手を伸ばそうとしたとき、目の端に赤い明滅が見えて顔を向けた。サイドボードの上に置かれた固定電話が、留守録があることを伝えていた。リビングの明かりを点けて、もう一度電話機を見る。

再生ボタンを押してみたが、用件は入っていないかった。着信時間を知らせる無機質な声のあとに一瞬の無音が続いて、ポーリング音が続いただけ。留守番電話だと判って通話を切ったのだろう。伝言を残さなければいけないほどの用件はなかった、ということか。

苛立ちを感じながら、受話器を取り上げて番号を押そうと指を伸ばす。が、数字の並んだボタンの横にある『留守録』のボタンに再び目が止まって、あることに気が付いた。

妻は、自然死なのだろうか？

いつもの不調の延長で死んでしまったのだろうか？　もしかして、自殺なのではないか？

バカな憶測だ、と一瞬口元が歪みかけた。けれど、本当に憶測だろうか？　という疑問が一気に背筋が冷たくした。

本当に自殺だったら？　それでも、通報しなくてはいけない事実に変わりはない。だが、ただの病死とは訳が違う。

受話器を叩き付けて、寝室へと引き返した。ベッドに横たわったままの彼女を見て、蒲団を全部剥ぎ取った。Ｔシャツ一枚着ただけの彼女が横たわるばかりで、まさかと思った血痕などは見付からない。しいて云えば、股間の部分に失禁の跡がある程度だ。

次いで、サイドテーブルへと目を向けた。スタンドの下には目覚まし時計しかない。引き出しの中を改めても、殆ど使われないまま放置されたコンドームの箱があるばかり。脇に置かれたゴミ箱の中も、小さく丸められたティッシュペーパーが二つ、見付かったただけだった。

部屋の奥にあるタンスも、引き出しの中を片っ端から改めた。できる限り中身を乱さないようにしながらその奥を探る。例えば薬の箱。例えば鏡台の引き出し。遺書が見付かるかも知れない。自殺だと仄めかす何かを書き付けたメモや日記があるかも知れない。自宅で人が死んだ場合には、それが唯の病死や老衰であつても事件として捜査されると聞いたことがある。警察が少しでも不信感を持てば、たちまち家中を検められるだろう。そんなとき、薬を飲んだ形跡や遺書などが見付かったら？ 自分は、妻を自殺させた男になる。場合によっては、妻殺しの容疑者にすらなり得るのだ。

寝室を出て、キッチンへと向かった。勝手に判らない訳ではない自分を情けなく思いつつ、そういう状況を作った妻への新たな憤りに舌打ちしながら、引き出しと物入れを物色する。

領収書をまとめてある書類ケースや家計簿をまくり、折り畳まれた布巾の裏まで、何かに突き動かされるように確かめて回った。

リビングや風呂場、トイレへと続いて、下駄箱まで確認した。しかし、自分が書斎として使っている部屋まで検めても何も見付からず、がつくりと膝を落とす。

時計を見ると、既に深夜になろうかという時間になっていた。何も見付からないことに、安堵感が湧き起こっていた。だが、何も見付からないことにショックをも感じていた。

何も見つからないということは、彼女は 妻は、自殺などではなかったということだ。

ただ、死んだのだ。その虚弱ゆえの寿命を全うしたのだ。そう云えば、寝具は一切乱れていなかった。ならば、彼女自身さえ知らぬ間にその寿命は尽きたことになる。

それなのに。

不意に胸が苦しくなつて、天井を仰いだ。喉に締め付けられるような痛みを感じながら、咳くように息を吸い込んだ。喘息のように異音を発する呼吸が続いていると、目尻から涙が零れて耳の方へと冷たい軌跡を刻んでいった。

しかし、次の涙は流れなかった。

寝室へと通じるドアを見た。そのドアへと急ぎ立てられるように足を進めて、ぞんざいに押し開ける。相変わらずスタンドの明かりに照らし出されている妻の姿を見届けてから、弾かれたように踵を返した。リビングを横切つて固定電話の受話器を取りあげ、一、一、九のボタンを押す。発信音を聞く間もなく通じた回線に、妙に上ずった声で、妻が死んでいる、と告げる。回線の向こうで相手が何か云っていたけれど、それを無視して受話器を放り投げ、再び寝室へと取つて返した。

頭の中が真っ白だという自覚がありながら、妙に冷静な自分をも意識していた。自分の呼吸する音だけが、耳鳴りのように鼓膜を揺すっている。

妻の、蠟人形よりも作り物めいた肌を見下ろし、その胸に両手を置いた。冷たく妙な弾力を返してくるその感触に立つ鳥肌を何とか無視して、震える息を詰めて、そこに体重をかけるように押した。

無駄と判り切った蘇生を試みながら、何回押し続ければ救急車が到着するだろう、と考えていた。

（後書き）

ご精読アリガトウございました。

ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4795k/>

彼女の死

2010年12月31日22時40分発行